

イオム

ENHAVOR

ヨーロッパの旅・5／平山房子……………1

労働に関する断章・その3

労働と職業／日野善太郎……………9

＜平民大学講演会＞について／河本乾次・25

「負ける」ということ／寺島珠雄……………32

大杉栄と震災の思い出／杉藤二郎……………35

短歌 浮遊する塵／高橋光吉……………21

詩 挽歌・風景／山口 英……………36

憎悪／高島 洋……………38

＜聞き書き＞ わが回想

塩 長五郎（戸駒恒世 編）……………41

・全国交流会・報告と意見……………22

・グァム労働者からの手紙……………40

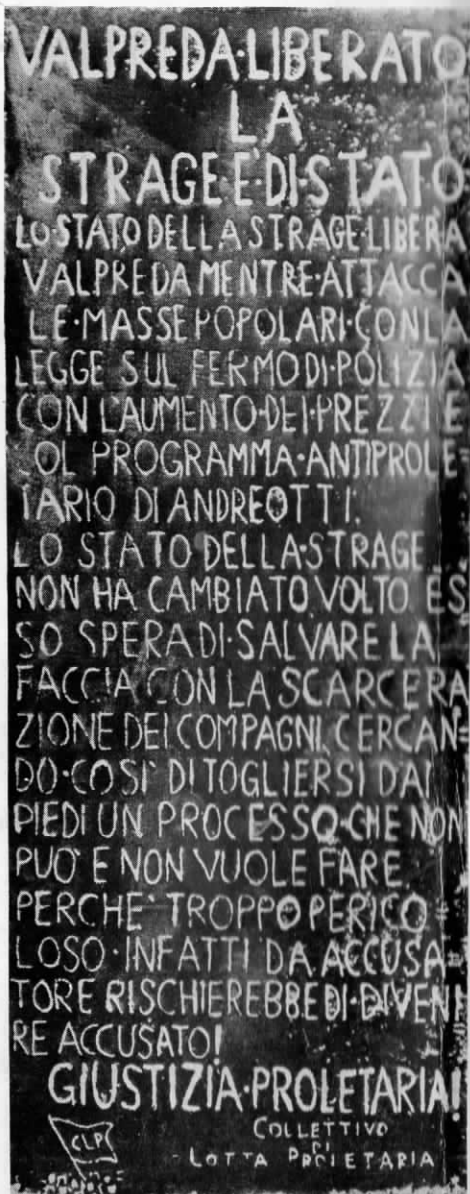
・6号合評会報告……………54

記録／11・9 相沢尙夫講演会（大阪）

＜日本無政府共産党＞

——1930年代アナキズム革命運動の
背景を中心として——

講演／相沢尙夫 編集／実行委……………57



ことばの羽ばたきをもとめて……

70年代の今、日常の生活と思索の中から生れる《夢》と変革への《志》に確かなかたちをあたえ、共同のものとしていくために……

私たちはちいさな印刷所《摩耶プリント》を出発せました。文学・思想の個人・同人雑誌、グループの会報・機関誌、詩集・論文集といった自費出版物などを、あえて現在の印刷方法中、もっとも安価・手軽なタイプ印刷を中心に需要にこたえていくつもりです。もちろん各種活版・オフセットもご利用いただけます。

あなたの希望、あなたのプランを……

私たちはご相談に応じていきたいと思っています。
どうぞお気軽にお問合せください。

摩耶プリント

神戸市灘区岩屋北町3丁目4-2
電話神戸 (078) 882-0948

イオム 第7号（季刊） 発行 1974年12月1日／発行所・イオム
の会・神戸市葺合区熊内町1丁目5-3／発行人・前田幸長／
印刷・摩耶プリント 定価 250円

太陽そして陽気な仲間たち

平山房子

1 ビストイアへ

ミラノからの夜行列車で早朝のフィレンツェに着いた。アルフレッドが仲間と連絡を取りにいったが誰とも会えず、我々はふたたび汽車でビストイアに向った。

フィレンツェの北西三〇キロに位置する人口十萬の古都の落着いた雰囲気は私の旅情を大いに慰めた。ほとんど崩れかかった石と土の家々がたがい支え合いながら長い年月を耐えてきた街並みの、狭い路地に入るとどこからともなく放尿の臭気が鼻につく、と急にハッと息をのむ思いの美しい建物が目の前に現われて足の運びをさえぎったりする。そんなイストリックなたたずまいの中に、壁や塀に書かれた「アナルシー」の文字や謀殺された同志の名前などを大きく書きなぐったプロバガンダが至るところで目につく。この戦術はフランス・イタリア

で、アナキスト・グループの存在する街では必ずといってよい位見られる光景であるが、古い歴史と伝統の中で生きつづけるビストイアやピサのような街でその文字に出会いと、ひとときわ生彩を放って迫って来るように思える。イタリアでは落書きの現場を見つかると思捕されるから、大抵は夜を選んでやるということであったが、それでも逮捕歴の持主は豊富だ。フランコはすでに四回逮捕されたといっていた。

人家のつまった狭い裏道に「ポロンタ」紙の「アウレリオ・ケッサ」の住居があった。だがその扉は固く閉ざされていた。フランコは我々を表通りのカフェに待たせると一人で出ていった。どこへ行ってもバカンスの時期で、思うように仲間には会えないのが我々の旅程をはかどらせないし、フランコにも苦勞をかけることになってしまふ。

しかしフランコもアルフレッドもそんなことは意に介していないようにのんびりした顔である。ともかく先は長いのに日数はどんどん過ぎていき、多くのものを観たい、多くの仲間と会いたいと欲ばるあまり、我々はつい彼等に先を急がせる。けれども、「日本からはるばるイタリイまでやってきてどうしてそんなに旅を急ぐのか。もったいない。落着け！ 落着け！」とフランコ達は笑ってとり合わない。

二時間あまりも待たせようか。ノースリーブのシャツとミニスカートを、腰にセーターを小粋に巻きつけた黒ずくめの身なりの若い女性が現われた。大きな黒い瞳と鼻すじの通った、きりっとした顔立ちが見るからに勝気そうな美人だった。彼女の車に乗せてもらって街はずれのアバルトマンについた。フランコがそこで我々を待っていた。そしてその家のあるじ、カルボニ・ジョルジョを紹介された。小柄で柔和な愛想のよい労働者だった。車で迎えに来たのは彼の妻のグラチアであった。彼等は《ボロンタ》のメンバーではなく独立したグループを組織しているということで、二、三の仲間達が我々の短い滞在の間に顔を出したが、気持よい若者たちばかりであった。その一人、クロロディオ・ロザティは若くハンサ

ムな教師であった。英語のうまい彼を交えて我々はその夜をビストリアで過した。カルボニが自分で作ったステッカーやチラシ等を部屋一杯にひろげて見せる。ロザティは《ジュゼベ・ビネリ》をうたったドーナツ盤を記念にとプレゼントしてくれた。

2 ビサー・ピサ・アナキスト連盟

二八日の朝、ジョルジョ夫妻の見送りをうけてビストリアを発った。滞在中、車で精力的に走りまわったグラチアが健康そうな白い歯を見せて我々の汽車にいつまでも手を振っていた。彼女は頼もしく、しかも可愛らしい女性として私に印象づけられた。

三〇分後、ふたたびフィレンツェに着いたがやはり誰とも会えないので我々はピサに行くことにした。ミゲルという赤毛の青年が我々をピサ駅に迎ええた。ここには《ピサ・アナキスト連盟》があり、ビエトロ・ゴリー（一九二一年暗殺されたアナキスト）通りの近くに事務所があった。救急車が何台かとまっている車庫の二階で、建物は古びていたが、演壇のある集会所もあって、かなり広かった。このメンバーはほとんど学生だと聞いていたがバカンスのため街にはいなかった。会えたのはピ

サ大学のミゲル一人だった。見るからに人の好きそうな老人が二人留守番をしていて、我々を歓迎してくれた。彼等は毎日のようにここへ来て過しているという。他にベネツィアから来たという二人の労働者が居合せてフランコやアルフレッドの顔を見るや時間を惜しむように自分達の書いた論文の批評を求めている。またあどけなさが残るういいういしい若者であった。

壁に貼ってある写真の人物に見覚えがあるように思えて眺めていたら、イタロー・ガリネイだと教えてくれた。ガリネイはピサで長年の《セーメ・アナルキコ》紙を出していた。一九六五年頃から、老令のため新聞発行が不可能となって引退するまで私は彼と文通していた。見覚えがあったのはガリネイが送ってくれた、ピサの斜塔を背にした彼自身の写真によるものだった。私が彼と知己であることを知ると、皆驚いたようであった。ガリネイが大男だったこと、ブルーの便箋と封筒を好んで用いたこと等私が話すと、「そうだ！ そうだ！」とミゲルは何度もうなづいた。その時私は「ガリネイとはフランス語で文通した」といったが、帰国して調べてみたら、それはイタリー語で書かれてあった。

一九六六年一月に姫路で《平和と戦争》というテ

マによる資料展が開かれた。その時私はガリネイに資料を要請した。彼はその趣旨を《セーメ・アナルキコ》紙上に掲載し、広く協力を呼びかけてくれた。おかげでイタリー各地から資料が届けられ展示会にぎわしたのであった。非常に誠実な人柄で、こちらからの通信には必らず返事があった。その頃すでに八〇歳とかで、その後引退し新聞も出なくなったと聞いている内に彼の死を知らされた。そうした間にいつか私は過去の人として彼のことを忘れ勝ちであった。しかしこのピサでは彼ははっきりと生きていた。私が考えていたより、はるかに偉大なアナキストとして人々の心の中に生きていた。私はなんとなく愉快になった。

皆でそろってアルノ河畔を散策し、ピサの塔を見物する頃には夜になった。食事をしようとレストランに入ったら数人の先客がいた。ミゲル達は「あいつ等はトロツキストだ」と説明しながら、その男女と親しそうに口を利いていた。トロツキストといわれた方も食事をすませて出ていく時、笑顔で我々の一人ひとりに握手を求めたのだった。

翌朝、私の連れの一人が行方不明だといって大騒ぎした事件（何のことはない、早く目覚めた彼が散歩をかね

て市内観光をしてただけで、当人は置手紙をして宿を出ていたのに誰もそれに気づかなかった。」を残して二十九日いよいよローマ經由でシシリイ島へ向け出発する。

3 シシリイへの列車

ローマ駅に着いたのは夜の八時半であった。そのままシシリイ行きのホームに直行して我々は列車を待つことにした。何しろフランコはバリで刷上った重い本の包みをさげているので小荷物預り所にも置かぬかぎり気軽にその辺の散歩もできないのだった。長く薄暗いブラットホームに我々は腰を下した。私の連れが、

「なあアルフレッド！ 腹がへったなあ！」

と日本語で話しかけた。空腹と暑さ疲れで外国語を使うのが臆劫になったのだろう。

「その辺で何か買ってこようか！」

「ああ、それがいいな」

もっともらしい表情でフランコがフランス語で答えた。勿論アルフレッドもフランコも日本語は知らない、しかし食べる事に関して言葉の不通はなほらしい。急に元氣になった二人が肩をならべてどこやらへ消えたと思ったら、ほどなく両手にワインの瓶とビツアの包みをかか

えてもどってきた。湯気のたつ大きなビツアにかぶりついたらきつとおいしかっただろう。だが私は乗車前の落着かない気分であった。「後で、乗ってから食べるわ」というとフランコがさえぎって、「今食べる」となれば命令的にいう、「汽車に乗ったら食べられないから」。意味がよく分らぬまま、それでも彼の威圧的な気迫に押されてビツアを手にしたものの一口かじっただけで私はそれを自分の荷物の中に入れてしまった。

時間がせまり大きな荷物を持った乗客がゾクゾクと増えてくると、薄暗いブラットホームは一種異様な雰囲気が出た。それはいつも見慣れている旅行風景とは少し違っていた。家族づれや友人同士、また一人旅とまちまちに集まっていた。そこに共通してかもし出される一種華やいだ明るい空気がここには感じられないのだ。やがてホームに向ってくる汽車の姿が見え人々の流れがそれに向って動きはじめるとフランコとアルフレッドは上衣をぬぎシャツ一枚になった。そして驚いて眺めている私に向って、「フサコ、ここを動いてはいけないよ」と二度三度念を押すと彼等は出発点に立つマラソン走者のごとき構えて、ホームに入ってくる汽車に身構えた。人々はホームに滑りこんできた列車についてド

ッと走り出している。フランコらもその一輛のデッキをめぐってバッタのように飛びついた。列車が徐行しながらゆっくりとホームに横付けになった時、そこに殺到する群衆の叫び声、自分の体より大きいトランクを必死に引きずり窓から放りこむ男や女、泣きわめく子供、一瞬にして起った天下のローマ駅でのこの大混乱に私はなすすべも知らなかった。

いくらその場を動くなど念をおされていても、どうしてもこのまま静止の状態をつづけられよう。それは私の生理的要求が許さなかった。忘然の数秒がすぎると、私は体中の血が熱くなってくるのを感じた。同様にポカンとしている連れに声をかける余裕もなく私は荷物をつかむとフランコ達が飛び乗ったと思える車輛の方向めがけて駆け出した。こちらへ走ってくるフランコとバツタリ出くわした。「あそこだ！」と彼が指さす方に私は走った。窓からアルフレッドの大きなヒゲ面の顔がのぞいて「ここだ！ここだ！」と剣闘士のようにたくましい両腕が伸びる。その手に荷物をゆだねると、私は追いついてきたフランコと一諸に乗りこもうとデッキに飛びあがる。だがギッシリつまった人垣、おまけに電気が消えていて真暗な通路の入口で女同士が泣きさけぶ赤ん坊をはさんで

何やら大ゲンカの真最中、ここはだめだとあきらめて反対側のデッキに走る。通路まで入ったとたん動きがとれなくなった。「失礼！^{ベルメッソ・ベルメッソ}ごめんなさい！」とフランコがいうので私も負けずにベルメッソを連呼しながら、なんとかしながら通ろうとするのだが、すしづめの通路は誰も動けない。アルフレッドの名を大声で呼ぶと「オーッ」と返ってきた声が案外近かったのでホッとしたら、フランコが「あれはボナンノの声ではない！ 別のアルフレッドだ」という。まわりの男女がどっと笑う。

何とかアルフレッドのいる車室にたどりついた。大男といえども彼一人で我々全員の席を確保しつつけるには、我々がたどりつく迄に時間がかかりすぎた。目白押しに坐ってみたもののフランコがはみ出してしまった。暗い電燈がつき、あふれんばかりの人と荷物を乗せた汽車がやっと動き出して、開け放された窓から夜風が吹きこんでほっと一息ついたものの、赤ん坊と幼児、それに老婆まで入れた大家族と網棚からすり落ちそうな大きなトランクの山、食料品の入っているらしい袋がぶらさがる車室の中で、うっかり足を伸ばすことも出来ぬ窮屈さ。入りきれない相客の家族達が入れ替り立ち替り車室に出入りする。何のことはない、まったくの難民列車である。

だが通路であきらめ顔でたえず多くの乗客にくらべれば、アルフレッドとフランコの奮闘のおかげで坐れただけでもその幸運を感謝すべきだろう。この列車を利用する乗客のほとんどはシシリへ行くということで、途中の停車駅で空席を見つけることはまず難かしいという。これから一四時間あまりを立ったまますごさねばならない人々のことを考えずにはいられなかった。フランコは自分の荷物の本の包みをイスがわりにして立っている婦人を坐らせた。彼はどんな時でも周囲の人々に細かい心づかいを忘れない男だった。

出かせぎ先から休暇で島に帰る人々なのだろう、苦勞のきざまれた暗い表情の人々が多かった。イタリーの、豊かな北と貧しい南との地域差は、ローマから南へ走るこの列車によって実に明確に呈示されていた。旅行中はハシシリアンVという言葉の底に侮蔑をこめて話すヨーロッパ人に度々出会った。悪意はなくとも、ミラノの一同志は、「シシリへいくなら君達、バスポートを忘れちゃいかんよ」と冗談をいって我々を笑わせたものだ。だがそのシシリアン達は屈托がなかった。坐るところがない彼らは夜通ししゃべり、食べ、飲み、歌ってすごすのだった。

4 カターニャ——アルフレッドの家で

車中の一夜がすぎ、メッシーナ海峡でフェリーに汽車ぐるみ乗りこんだ時、はじめて席を立つことが出来た。それでも荷物と席を失わないためにアルフレッドが残り我々は甲板へ立った。朝の潮風が心地よかった。手に取るように対岸のメッシーナの街がゆっくりと船の進行とともにひろがっていく。けれども五十分の船旅を終えて汽車がシシリ島の線路上を走り出した時、それは時刻表とはおよそ縁遠い遅れようであった。海峡を渡った時の手際の悪い作業のためだったが、誰もそんなことは気にかけないらしい。作業中の駅員が大きな声で歌いながら停車している列車の窓の下をゆっくり歩いていったものだった。

カターニャについてのはもう正午近かった。ハニールバスVを提示して駅の改札を出た時、ローマからここまで一度の検札もなかったことに私は気づいた。明日、ラグーサに行くことを約束して我々はフランコと別れた。案内されたアルフレッドの住居は美しいアバルトマンであった。メリナ夫人はお白粉気のない素顔はまだ若かったが、大柄で堂々としていて貴族があり、アルフレッド

と似合いの夫婦に見えた。アルフレッドは家に帰ってきたのは二十日ぶりということで、嬉しさをかくさず、何

度も彼女にキッスしては、「ぼくの奥さん」といって我々にその甘いところを見せつけるのだった。そして旅行中、ローマ駅での活躍以外のものらしくしていた彼が、彼女のそばに帰ると、急によく働き出したのには驚いた。夕方我々は彼の父に紹介された。上品で物静かな老紳士はカターニャのブルジョワで、自分の経営しているバーに我々を案内して、カターニャ名物だというアイスクリームを振舞ってくれた。日本でいわれているそれとはかなり違っていて、透明感のある液体に近いアイスクリームだった。

車でカターニャの街を走っていると、むやみに紙くすと車が多いのに気づく、そんな街並の一つに夫妻の子供達の学校があった。門前で車を止めて待っていると、入っていったアルフレッドが喜々としてしゃぐ二人の子供にまといつかれながら出てきた。大柄な夫妻だけでも結構小さく見える彼の車に我々と二人の子供が乗ると車体は今にもはちきれんばかりの超満員になった。子供達はひさしぶりの父親に迎えられただけでなく日本の同志Vの珍客が加わっているのもう夢中である、姉と弟

はひっきりなしにしゃべりたて、祭のような大さわぎを乗せて車は走った。

アルフレッドは広くて立派な書齋を持っていた。壁面はすべて書棚によって占められ、ぎっしりつまった書籍は嘆息が出るほど我々をうらやましがらせた。彼がやっている「アンダーグラウンド」社の出版物をこちらの希望にこたえて彼は中央の大きな事務机の上に積み上げた。後日それをいくつかの小包にして日本の我々のアドレスに送ることを約束してくれた。金はいらぬと断りつづける彼とケンカするようにして我々は代金に相当する金額をカンパという名目にして無理矢理彼の手に押しつけた。アルフレッドは家に帰るとすぐにシャトー・ジュ・ロワールで我々から借りていた五十ドルをイタリー・リールで返してくれた。私はイタリー旅行中彼の手柄に接することによって、彼に対する不信感は消えていたし、かりに金がそのまま返ってこなくとも、それで、彼への私の気持がどれほど変化するという訳のものでもなくなっていた。そして金が返ってきたという、いわば当然であるその事実の前に、私はまるで罪人のように恥じ入り卑下している自分を見出していった。それは最初に彼に抱いた不信に対する報いだった。

翌朝、二人の子供を学校へ送り出してから、夫妻は我々を車に乗せてエトナ山に向けて出発した。カターニャの街はどこを走ってもゴミと車があふれていて決して心地よい街とはいえなかったが、ヨーロッパ第一の火山といわれるエトナ山に通じる道路は広くて快適なドライブが楽しめた。麓まで車で来ると、目の上に霧をまとったエトナの姿があった。ここからはケーブルを利用しなければならぬ。「上まで行くのだったら君達だけでのぼってきてくれ。ぼく達はここで待っているから」とアルフレッドはいった。生涯に再びここまで来るチャンスがあるとはいい難いから、出来れば見ておきたいと思っていたのだが、このケーブルは往復二千リール要るといふ。彼等がいうには、「二人で四千リール使うのなら、我々はその金でうまいものでも食べる方がいい」成程これではイタリイ人でなくとも我々であってもその方がいい。全員一致で、雲の中に隠れては姿を見せるエトナを見上げるだけにして再び車を走らせた。行先はフランコの待っているラグーサーである。エトナから南方へ約九〇キロ、途中、石垣とオリブ畑のつづく広い道の片側に見つけたレストランで食事をした。その最中アルフレッ

ドは、「車は大丈夫か？」と幾度も私にたずねる。屋根に鞆をくくりつけたまま止まっている我々の車がちょうど見える位置に私は坐っていた。「ある。ある。大丈夫！」という、「気をつけて見ていろよ、盗まれるから」とくりかえす。ヨーロッパ人はイタリイ人を泥棒のようにいいたがるが、イタリイ人同士でも他人は信じられないとみえる。

ここで食べたパンはヨーロッパ旅行中我々の知るかぎりの最高の味だった。私の連れはこれを食べたばかりに帰国後は絶対に日本のパンが口に通らなくなったという。という、いつも食べることはかり言っているようだが、実際フランスやイタリイを旅すると、食物をぬきにしたい出はないといってよい位である。彼等は食べることに食欲で、それをこよなく愛し、大切にする。それが生きる歓びなのだ。

我々は心ゆくまで食べて飲んで、車も盗まれず天下泰平で先を急いだ。石の家とサボテンのとり合わせが目のとどく限りのオリブ畑の中に点在し、荒涼とした風景はメキシコにでも来たようであった。私は無性に愉快になって歌い出した。助手席で満腹感から居眠りをはじめていたメリナも、ハンドルを握る(以下24頁下段に続く)

全国的連合のための討論合宿とも関連しつつ発言された

ものであった。残念ながら、その内容は省略しなければならぬ。紙数がつきたこと、ならびにアナキストの組織についての各人の論理とイメージを誤りなく伝えるのは至難であるからだ。ただし、この問題に関しては、交流会での各発言を踏まえつつさらに追求していくことをわが「イオム」よりの参加者として約束しておきたい。

今後必要に応じて交流会をひらいていこうという申し合わせを最後に、二日間にわたる交流会は終わった。時間と費用をかけて各地から参集した割には収穫が少なかったとする見方もあるだろう。たしかに確たる方向性を見出し得なかったという点ではその通りである。(あるいは、このような交流会からは、八方向性Vなど出てこないということ、私たちは最終的に確認しなければならぬのかもしれない。)しかし報告者は、本集会は即有効性を発揮するという性格のものではなく、これが呼び水となってさらに交流の輪が広がり、その内部から真に強固な連帯をつくり出していくものであると考える。そしてその成功は、われわれの主體的な努力にかかっているのである。

(8頁より)

アルフレッドもみんな私につられたらしかった。やがて、広い大地の中の一本道をたどる小さいボンコッ車からコーラスが流れた。

歌声はラグーサーの街に入るまで続いた。ラグーサーは石だたみと坂の街だった。車はガタガタと車体を鳴らしながら走り、つるつるに磨きあげられたように光る石だたみの上を幾度か曲り、サン・フランセスコ通の狭い路上に停った。フランコが家から出てきて迎えた。一日会わなかっただけに、彼の顔を見るとなつかしかった。

荷物をおろす間もどかしそうにフランコは全員を近く、の歯科医の門標をかかけた家へ案内した。このドクタ―は親日家で、我々の着くのを待ちかねていたのだという。雑談の一ときをすごすと、ボナンノ夫妻はカターニャにもどることになった。二人と別れる時、サヨナラといって手を差出そうとした時急に熱いものがこみあげ私は戸迷って今出てきた歯科医の戸口の蔭に隠れた。メリナが追ってきて私を優しく抱き寄せた「もう終りじゃないわ。今度は私達があなたを訪ねて日本へ行くわ」。私は涙をふいて彼の前に進んだ。私を見下す優しい目差がうるんでいた。黙って握手をし互いに手をふりながら車は遠ざかっていった。